

Hello! FUJISEI

No.119

高齢化の進展が医療費の増大を招いている要因と言われますが、確かに年齢が上がるにつれて、健康への不安は強くなります。

「平成24年版高齢社会白書」によると、高齢者の半数近くは何らかの自覚症状を訴えています。日常生活に影響がある人は5分の1程度となっています。この日常生活への影響の内容は、「日常生活動作」（起床、衣服着脱、食事、入浴など）が人口1,000人当たり100.6、「外出」が同90.5と高くなっています。

65歳以上の受療率（高齢者人口10万人当たりの推計患者数の割合）は、平成20年において入院が3,301、外来が10,904となっており、他の年齢階級に比べて高い水準にあります。近年は減少傾向となっています。

65歳以上の高齢者の受療率が高い主な傷病をみると、入院では、「脳血管疾患」（男性555、女性653）、「悪性新生物（がん）」（男性473、女性236）となっていて、外来では、「高血圧性疾患」（男性1,293、女性1,706）、「脊柱障害」（男性1,125、女性1,126）となっています。

高齢者の死因となった疾

高齢者の健康は…

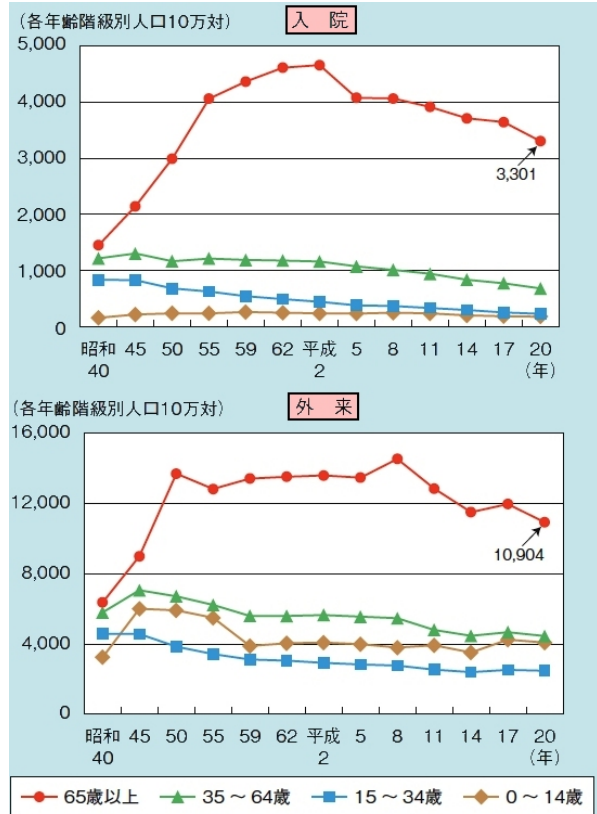
加齢により健康に不安 半数近くが自覚症状

病をみると、死亡率（高齢者人口10万人当たりに対する死者数の割合）は、平成22年において、「悪性新生物（がん）」が967.5と最も高く、次いで「心疾患」576.8、「肺炎」391.2の順になっており、これら3つの疾病で高齢者の死因の約6割を占めています。

この結果、国民の死亡場所の構成割合の推移では、昭和26年では「自宅」が82.5%を占めていましたが、平成22年には「病院」が77.9%を占め、「自宅」は12.6%まで低下しています。

年齢階級別にみた受療率の推移

資料：厚生労働省「患者調査」



65歳以上の高齢者の主な死因別死亡率の推移

資料：厚生労働省「人口動態統計」

